第8回

農業DX構想の改訂に向けた有識者検討会

令和6年2月21日（水）

農林水産省大臣官房

第8回

農業DX構想の改訂に向けた有識者検討会

日時：令和6年2月21日（水）15:00～17:00

会場：農林水産省大臣官房統計部

第3・第4会議室（WEB併催）

議事次第

- 1 開会
- 2 議事 農業DX構想2.0（案）について
- 3 閉会

【配布資料】

資料1 議事次第

資料2 農業DX構想2.0（案）～ 食と農のデジタルトランスフォーメーションへの道筋 ～

参考資料 農業DX構想2.0（案）概要版

○田雑調査官 農水省大臣官房デジタル戦略グループの田雑です。

定刻となりましたので、ただいまから農業DX構想の改訂に向けた有識者検討会第8回会合を開催します。

委員の皆様、御出席ありがとうございます。また、第7回検討会では、非常に御活発な御議論を頂き改めて感謝申し上げます。

本日は、会場では三輪座長、中谷座長代理の2名が、オンラインでは6名が参加されます。

宮島委員は、欠席です。また、大橋委員と加藤委員は16時までの出席です。

本日の議事は、資料1のとおり、農業DX構想2.0の案についてです。また、この会議は、録画・録音をさせていただきます。これは検討会の議事録を正式に正確に作成するとともに、ホームページに掲載することにより議論の状況を広く周知するためです。

それでは、以降の議事は三輪座長にお願いいたします。

三輪座長、よろしくお願いいたします。

○三輪座長 本日の議題は農業DX構想2.0です。

初めに、文案の説明を頂きます。資料2、農業DX構想2.0（案）を御覧ください。

表紙と目次の後から本体が始まりページ番号を振っています。1ページの下から2段落目、「上記のような」で始めるパラグラフを御覧ください。「当検討会からデジタル化に取り組む農業・食関連産業の関係者へのメッセージとして」農業DX構想2.0を取りまとめています。こちらは前回の検討会で事務局から示された構成案のとおりです。私は、こちらの文言で一番大事だと思っているのは、我々検討会から出すことで、農業DX構想の実現に向けてエッジが効いた内容に書くことができたことだと考えています。

内容の説明は事務局からお願いします。

○板橋課長補佐 私、板橋より資説明します。

参考資料「『農業DX構想2.0（案）』概要版」は、検討会委員以外の記者などの外部向けに、本文を見る前に内容について分かりやすく作成しました。

資料2の、農業DX構想2.0の文案内容の説明に入ります。

まず、構成案の位置付けについて説明します。前回の検討会で議論した内容や、その後いただいた御意見を踏まえ、この文案を作成しました。したがって、皆様の御意見をどのように反映したかを含め、内容の説明をします。

表紙では、本構想の内容をストレートに表現し、「食と農のデジタルトランスフォーメーションへの道筋」という副題を考えました。日付の下は現在空白ですが、この後、正式版として公表する際に、農業DX構想の改訂に向けた有識者検討会というクレジットを付けたいと考えています。表紙の裏には注釈があり、本構想の文案の最終チェックに当たって、当グループで開発いたしました自然言語処理に関する知見を盛り込んだチェックツールを使用した旨を記載しております。

それでは、内容の説明に入ります。

本文の1ページ目です。最初の「はじめに」ですが、これは、その後の第1章から第4章までの内容を総括した内容です。3年前の農業DX構想の策定からのDXの進捗や、農業DXに取り組む意義などに触れています。また、構想2.0は、デジタル化に取り組む関係者に対する検討会からのメッセージという位置付けであるということを示しています。

第7回の検討会での御意見に関しては、1ページの末尾から2ページの冒頭の段落で、「入り口のひと山」の先には様々な課題解決にデジタルの力で取り組めると、その「ひと山」がこの数年で低くなっているということが記載しています。これは前回頂きました、これだけ大事だからやれと言うだけでは上から目線になってしまうという指摘や、少し工夫で様々なことができるようになっていく、あるいは、これを更に進めるともっと良くなるよということに触れ、工夫すればできるというメッセージを示すことが大事であるとの意見を踏まえた記述としました。

また、その次のパラグラフは、デジタル・ネイティブな若者や農家が活躍できる農業という未来から逆算した記述を書いたらどうかという意見を踏まえての記述です。

このほか、関係者に対しDXの動きに乗らないとまずいことが伝わる書き方とすべきだという意見は、最後から二つ目の「『バスに乗り遅れる』手はない」という段落に記載しました。

全体として、指摘の上から目線感を払拭しつつ、したたかに取り組んでみようという意欲を持てるような記述になったのではないかと考えております。

3ページからは、第1章として本構想の意義及び位置付けについての記述です。

2段落目、デジタルトランスフォーメーションに至るまでのデジタイゼーション、デジタルイゼーションという段階ですが、これまで農業DXの文脈では、それぞれの段階が具体的に何を指すのか、明らかでなかったと考えています。そこで、この段落でその具体的な内容を明らかにし、後の第4章で道筋につなげていく記述としています。

3段目の最後の「『デジタル技術を活用し、一見矛盾する・両立しない課題を乗り越えて発

展していく』という農業DXの意義と同一である」という記述は、効率化と価値の創出・向上の両立がデジタル技術の重要なポイントであるとの意見を踏まえての記述です。

4ページの冒頭ですが、農業DXにより、単にツールの進化だけでなく、農業者のみならず食品を食べる人も含めて国全体が幸せになる明るい未来像を示す必要があるとの意見や、農業経営者のみならず消費者や関連産業、流通も対象としていることが分かる記述とすべきだという意見を踏まえ記述をしています。

5ページからの第2章は、現構想の現状と振り返りの記述です。

1段落目で、分野ごとに評価の差はあるものの、全体としては着実に前進し、DXに向けた移行期に入ったことを示しています。

一方で、2段落目から3段落目にかけて、個々の経営体レベルでの取組があっても、取組相互間の有機的な結合には至っていない場合も多く、優良事例を創出して横展開する必要があると考えています。

4段落目は、現構想は国の旗振りを強く意識していますが、それだけで十分というわけではなく、個々の農業者・食関連事業者の積極的なチャレンジや、それを支えるテック企業や研究者などの取組も重要であると考えています。

5ページの最後から6ページにかけて、構想2.0では現構想よりも具体的に農業者・食関連事業者がDX実現に向けて達成すべきマイルストーン、里程標を示しています。

最後の段落では、個々の農業者・食関連事業者ごとに置かれた経済的、技術的な状況も異なるため、着実にDXに取り組める農業者・食関連事業者を前向きに評価すべきだと記載しています。

ここまでが総論的な話で、7ページから第3章、各分野におけるデジタル化の現在位置として各論的記載に入ります。前半の1節で生産、流通、行政などの現場における取組状況、後半の2節で情報通信環境や人材、技術開発、データなどのバックボーンとなる分野の取組状況を記載しています。

1の(1)の「生産現場」の1段落目後半に、初期費用の低廉化や、大規模農業などで技術・システムの導入の進展について書いています。7ページの最後の段落の2つ目の所で具体的な事例を記載しています。これは、これだけサービスが展開しているためデジタル化に取り組むことは難しいことではないことを、伝える記載としています。

9ページでは、スマート農業推進パッケージや農業支援サービス事業体の育成・支援などの農林水産省の取組についての紹介です。

9ページの最後の段落では、データやプログラムがAPIの形で提供されているため、それに基づいて各種のサービスも展開されていることの紹介です。これは、APIによる農業者へのメリットを分かりやすく示すべきとの意見を踏まえ、農業者にとってスマホで気軽に世界有数の研究成果を入手できる状況であると記述しています。

10ページの(2)は、農業経営に関する記述です。

(2)の1つ目では、委員からの発言を踏まえ、勤怠管理システムを含む作業管理などの業務・経営管理や、生産コストが増加する中での、デジタル技術を活用したコスト把握について記述しています。

11ページは検討会で取り上げた事例の紹介です。カーボンクレジットに関してエビデンスの作成・提出を容易にするアプリによって農業経営にどのようなメリットがあるのか明確にすべきとの指摘を踏まえ5行目から6行目にかけて「取組による収益化も含めて、農業者が気候変動対策に取り組みやすい環境が整備されてきている」と記載しています。

11ページから12ページでは、金融面での取組とし、日本政策金融公庫様や収入保険・農業共済でのeMAFF活用の取組を記載しています。

12ページの「(3) 農村振興・農村環境整備」では、「デジ活」中山間地域や農村RMOについての記載です。地域の課題解決に役立つサービスやビジネスを提供する組織としてのRMOがあると、デジタルを使ってRMOがどう地域の課題を解決するかが重要との意見を踏まえ地域づくりにデジタル技術を活用する実証段階である現状を記載しています。

12ページの最後から13ページにかけて、鳥獣被害対策へのデジタル技術の活用や、地域通貨、Web3技術の活用による地域活性化の取組について触れています。

13ページの下から「(4) 流通・消費」に入ります。

13ページから14ページにかけて、物流2024年問題に触れた上で、14ページで当検討会で発表されたkikitori様の事例を含め、物流分野での課題解決に取り組む例として紹介しています。

15ページの上半分では、消費分野においてベイシア様のデジタル技術を使った需給予測の精緻化等の取組を紹介しています。

15ページから「(5) 行政事務、行政情報」に入ります。

まず、eMAFFやeMAFF地図の紹介です。2段落目のeMAFF地図では、タブレットを使った現地確認が可能であることを明示的にすべきとの意見を踏まえて記載しています。

その後、飼養衛生管理システムの構築について、16ページの2段落目にまとめています。この2段落目では、前回の検討会での意見として、まだ達成されていない目標などを着実に達成

するという観点から、他の省庁で関係業務に携わる職員も含めて弛緩することなく実行していくことが必要だと指摘があったため、農業・農村政策に関わる関係府省においても着実にデジタル化の推進に取り組むことが求められると記載しています。

16ページの途中から、この章の後半です。「現場を支えるバックボーンとなる分野の現在位置」に入ります。

(1)の「情報通信環境」では、検討会での意見を踏まえ、機械的な条件では問題ない場合でも、通信圏外では、電波を使った農機が使えないなどの条件に不利があるという点や、その点に関して総務省とも連携しながら通信環境の整備に取り組んでいるという旨を記載しました。

その次が「(2) デジタル人材の確保、デジタルリテラシーの向上」です。

1つ目では、デジタル化に必要な知識や技能を有する農業者等の数の問題や、平均的なデジタルリテラシーの水準を課題として指摘しています。

2つ目から対策について、特に、農業者が誰でもデジタル化に取り組みやすいという観点から、学習用動画コンテンツはスマホなどで、誰でもすぐに見ることができる旨を記述しています。

17ページの「(3) 技術開発・実証・普及」では、民間の研究開発への支援策のほか、国自身での研究開発、横展開の推進などの紹介です。

その下、(4) データの利活用について、民間の取組とし、AGRIST様のスマートハウスや自動収穫ロボットの事例や、ミライ菜園様のAIを用いた病害虫診断予報サービスの紹介。農水省におけるデータ活用の取組、さらに、地方自治体によるSAWACHIの取組を記載しています。

20ページから第4章が始まります。ここまでは現状やこれまでの進捗の確認でしたが、この章は導入や、導入後の、デジタルリゼーション、デジタルライゼーション、デジタルトランスフォーメーションといった各段階で実現できる内容と、その際の留意点を記載しています。

「デジタルトランスフォーメーションの起点」では、まず農業者・食関連事業者自身が、現場改革の意欲を持つことが重要であると改めて記載しています。とはいえ、農家にデジタル化の意欲があっても官・民、様々なレベルでの支援が必要であることは間違いありません。このため20ページ後半から、「2 デジタル技術導入時の支援」とし、これからデジタル化を始める方たち向けの支援策を紹介しています。行政による支援策やテック企業の参入も通常の農業分野と比べて特徴的な点であることからテック企業等による支援も記載しています。

その下の段落から21ページにかけて、情報面での支援を記載しています。

21ページの2段落目の農水省や自治体による情報提供について、農業者の用途に応じた機器

をカタログに載せるなど、横展開の取組があればとの意見を踏まえ「農業新技術 製品・サービス集」を紹介しています。

その次の段落では、難しくて使えないという声があるという意見を踏まえ、テック企業による丁寧な説明、農業支援サービス事業者の活用などの事業展開に関しても記載をしています。

21ページの後半からは、コスト面での支援についての記述です。特にこの構想は、対象として食関連事業者も含むため、21ページの最後の行から22ページの冒頭にかけては、農業者だけではなくて食品流通事業者に対しても支援策があるとことを記載しておいす。

22ページの中ほどでは、デジタル技術導入後の支援には、特に「入り口のひと山」を越えた後も農業者の維持費用が掛かる点が大変であるとの意見から、3段落目ではデジタル化によってコストを補いつつ、行政においてもきめ細かな情報提供を含めて支援の必要性を記載しています。

22ページの最後から24ページまでは、デジタイゼーション、デジタルライゼーション、デジタルトランスフォーメーションの段階ごとの記述です。

22ページの「4 デジタイゼーションの段階」は、これによって業務効率化というメリットが得られる段階であることの記述です。

23ページの最初は「5 デジタルライゼーションの段階」の記述です。この段階からデータ活用が本格的に始まると、収量の拡大や品質向上など、単なる負担軽減にとどまらないメリットを得られるが、データ活用、ハードルが高いこともありため、テック企業や行政のサービスも利用可能であることに触れています。

23ページの下6番、「デジタルトランスフォーメーションの段階」の記述です。この段階に至ると競争力が飛躍的に高まり、国全体が幸せになる明るい未来像の一つとして、価値の提供の在り方が大きく変わり、消費者と農業者が直接つながって顔の見える関係を作ることもできるなど、消費者への商品・価値の提供方法が大きく変革される旨の記載です。

続きまして、24ページから27ページでは、「7 デジタル化推進に当たっての留意点」について記載しています。

(1) は、分野ごと、農業者等ごとに状況は様々なので、それぞれの状況に応じて着実に進めることが大切だと記載しています。

(2) は、デジタル化は目的ではなく手段であるため、収支の見通しを持って進める必要があるということです。特に、前回の検討会でいただいた、DXに取り組むことで利益を出せるようにDX計画を立てる必要があることを紹介してはどうか、との意見を踏まえ記載しました。

(3) は、データ連携の不安払拭についてですが、農水省が示した、ひな形に基づき契約を結び法的安定性を確保すべきと記載しています。

25ページの冒頭では、部分最適になりがちだが、全体最適を達成するためには、第三者がハブとしての機能を果たしてデータ連携を促すこともあり得るのではと記載しています。

25ページから始まる(4)は、協調領域の創出に関する記載です。テック企業の相互連携により協調領域を創出することは、ユーザーである農業者の利益になり、ひいてはテック企業自身の利益にもつながると考えられますが、実際には、協調領域の創出に苦勞する事例も多いですが、協調領域を作るメリットが伝わる記述としています。

26ページの(5)も一種の協調領域の話ですが、データのオープン化は、行政による取組が求められることを記載しています。

(6)は、データ分析、データ活用により行政でEBPM、証拠に基づいた行政を推進すべきであり、その際に精度の向上、あるいは適切な手法の採用といったことに留意すべきだと記載しています。

(7)は農水省自身の仕事のやり方に関する記述です。デジタル化により農水省自身の仕事のやり方を抜本的に変えるべきとの意見を頂きました。職員がデジタルを使いこなし、農業・食関連産業のデジタル化を推進する原動力となり、省全体として、デジタルの力で横の連携を強め機動的に動けるようにすべき記述しています。

26ページの最後から27ページにかけての(8)ですが、グリーントランスフォーメーションの推進に世界中で取り組んでいる中で、デジタル技術をそこに活用すべきであると、さらに、GXがDXの牽引役となってもいいのではないかという意見を踏まえた記述としています。

27ページの頭の(9)は、テック企業関連の記載です。技術力はあるが、経営基盤が弱い中小企業向けに国から支援することで、テック企業の増加やサービス向上につなげていく記載です。特に、農業者の課題に対応するテック企業が足りていないとの意見を踏まえ、ベンチャーキャピタルによるスタートアップの掘り起こしへの支援などに触れています。

(10)は、現場の状況を踏まえて機器の導入を支援する主体が必要だとの意見を頂きました。これを踏まえ、きめ細かな相談やメンテナンスへの対応など、機器調整や相談対応に関する有償サービスの広がりについて記載しています。

28ページから第5章に入ります。ここはDXを実現した後の未来予想図です。冒頭に生産・消費・経営等の分野を横断する大きなビジョンを示しています。単にツールの進化だけではなく、デジタル技術を使うことにより農業者のみならず食品を食べる人も含め国全体が幸せになる明

るい未来像を示せるような記述としました。

一つ目に農業者にとってのメリットとして儲かる農業が実現している。

2つ目に、農村全体がデジタル技術により活性化して、都市の人も含めて多くの方々が農村に関わっている。

3つ目で、その結果、作る人、使う人、食べる人、それぞれを繋ぐ関係がで、単に経済的なメリットを超えたぬくもりのあるやり取りや、健康な食といった恩恵を感じることができる未来を示しています。

29ページ以降は、このような総論的な未来図を具体的に分野ごとにブレイクダウンしていった記述です。

まず29ページの「1 生産」ですが、農業生産力向上や、おいしいものが食べられるなど、世の中に分かりやすい表現で、インパクトを持ってメリットが伝わるべきとの意見を頂きました。このため1つ目で、農業者1人当たりの収量の増大や高品質な生産物の提供といった内容を記載しています。

また、デジタルツイン技術の紹介だけではなく、例えば儲かるであるとか、気候変動などのリスクに対応できるなどのメリットを具体的に書いてはどうかとの意見を頂きました。このため、「農業者は、リアルタイムで」から「こうして、デジタル技術の活用により」の部分で、具体的なメリットを記述しています。特に4つ目の、全体として外部環境の変化による悪影響やリスクの大幅な低減、ひいては国民への食料の安定供給というところが、大きなメリットだと思っています。

29ページの下から2つ目は、可変施肥によって肥料費が相当軽減できるという指摘がありましたので、可変施肥に関する記述を入れました。

29ページ最後では、先ほどの通信環境での条件不利に対応するものとして、衛星通信などの環境整備が進むということにより、多くのほ場でスマート農業機械が導入されている未来図を示しています。

30ページの1つ目は、遠い都市部からでも農業ができる様子です。

2つ目は、需給データの精緻化によるメリットの記載です。構成案では、適正な価格での売り切りをメリットとしていましたが、フードロスの削減や、食料の安定供給にもつながることも示しています。

3つ目、4つ目は、これまで暗黙知であったものがデータとして共有されることにより生産性が上がること、さらに、新規参入のハードルが下がり農業が若者の人気職種になる未来を示

しています。

30ページの後半からは「2 経営」に関する記載です。

1つめはアプリ等の活用による省力化、2つ目はデータの活用による経営判断の精緻化、3つ目は技術の導入コストの低廉化の話です。

31ページの1つ目、金融面のメリットとして、金融機関が農業者の経営状態をデータで把握することにより、経営の安定性や成熟性に着目した定量的な事業評価が行われることを示しています。

次に、これに付随し、金融機関の介在によって第三者への事業承継も容易になる未来を示しています。

3つ目は、農業従事者間での知識の共有によりハードルが下がり若者が参加していることを書いています。

31ページの半ばから「3 流通・消費」です。

1つ目、ブロックチェーン技術は、トレーサビリティに使うよりも、価値の創出につながる方向になるのではとの意見を頂きました。そこで、産地偽装対策やハラール対応などにより、安全性の担保や消費者の安心感の向上により付加価値が向上するという記述としました。

31ページの下から二つ目は、物流関係の記載です。未来感のあるようにとの指摘を踏まえ、荷捌きの無人化のほか、AIにより配送ルートや積載方法が提案される。事業者がそれに基づき連携をして共同輸配送を実現できることを書きました。こうした結果、サプライチェーン全体で最適化された効率的な物流が実現するという大きなメリットが得られると考えています。

31ページの最後では、消費の在り方について。農産物や食品については、モノ消費からコト消費に完全移行しているということはないのではないか、との意見を踏まえ、モノ消費も厳然としてあり、それに加えて高価格帯などでコト消費も盛んであると記述としています。

32ページの最初は、消費者のメリットとして健康食や栄養面での改善、かつ、個々の嗜好に合うようにカスタマイズされたおいしい食材が届くという旨の記述です。

二つ目は、小売と流通、生産の連携により自動的に生産・出荷調整が行われている記述です。

32ページの中ほどから「4 農村」に入ります。

1つ目は、デジタル技術の活用により、都市部の住民も含めて多くの人が農業に参加して当事者意識を持ち、みんなが何らかの意味で農業者であるという世界観です。その上で、みんなが農業者の当事者だということから、都市部の住民もDAOを組織したりして農村での活動をしているのが2つ目です。

3つ目はメタバースでの交流があつて消費にもつながることを記載しています。

生活面について、32ページの最後から33ページにかけて書いています。オンデマンドでの交通機関の利用や、オンライン注文による遠隔配送などにより農村での生活が便利になっていることのほか、農村にしながら都市部のオフィスにオンライン出勤や打合せを行う人もいて、農村が活性化している未来像です。

33ページから5の「行政」に入ります。

1つ目は、行政手続のオンライン化による効率化の話です。ここは単に効率化することではなく、その結果、現場の課題把握とか、それに基づく施策立案などの本来の業務に専念できているところがポイントです。

その下の3つ目は、行政でのデータ活用や、行政が策定したガイドラインによる様々な分野でのデータ活用の高度化についての記述です。

特に下から2つ目は、ベースの情報は整っているため、災害対策の初動情報として精度の高い情報が活用できるのではないかと、との意見を反映しています。

34ページから35ページにかけて、「第6章 終わりに」があります。

1段落目で、改めてこの構想が農業・食関連産業のデジタル化に取り組む全ての関係者に対する検討会からのメッセージである旨を記載しています。また、今デジタル化に取り組むことにより大きなメリットがあることも記載しています。

2段落目では、各関係者にマイルストーンを示すナビゲーターとして本構想を使ってほしいという狙いを書いています。

3段落目は行政向けに、デジタル化に取り組む農業者・食関連事業者に寄り添ったきめ細かな支援を行うとともに、データ活用の拡大・高度化を進め、より効果的な政策立案や農政の質の向上につなげてほしいということを示しています。

34ページの最後から35ページでは、検討会からの提案を二つ書いています。

一つ目は、1年後から見直しを開始して、約2年後をめどにこの文書を見直すこと。二つ目は、見直しが始まるまでも関係者が議論や情報共有の場を設けることです。ここに関しては、この構想の取扱いとして、ナビゲーターやマイルストーンが機能しているかの検証が必要だと意見を踏まえ、構想策定後の取組や状況も含めた情報共有、議論としています。

36ページから38ページでは、やや専門的な用語や、意味をはっきりしておきたい用語について、用語集を掲載しています。

39ページから40ページは、この検討会の審議経過の記載です。41ページは検討会委員皆様の

情報を掲載しています。

以上が構想案の内容です。検討会での議論の結果、充実した構想案を作り上げることができたのではないかと考えています。

○三輪座長 説明ありがとうございました。

ただいまの説明のとおり、これまでの検討会の中で様々な情報や意見などが反映されたものになっていると思います。

各委員から意見を頂ければと思います。大橋委員と加藤委員が途中で退席されるため、まずお二方から意見を頂ければと思います。

○大橋委員 ありがとうございます。

まず、事務局の方には、会議後のコメントもしっかり受け止めて、文章にさせていただき大変感謝します。議論の中身を、しっかり入れ込んであると思います。そういう意味では、構想案として整っていると感じました。

今後のことだと思いますが、最後の所では、マイルストーンを示すナビゲーターであるとのことですが、これを実際に、実地にワークさせなければと思っています。この文章だけでは、どうしていいのかわからない人が出ると思います。関心をもつ取っ掛かりにはなるかもしれませんが、これからどうするか、デジタルイゼーション、デジタイゼーション、いろいろ言葉は出てきましたが、正直な話、タイトルの「食と農」のような、何か彩りや土の匂いを感じません。逆に言えば、いろいろなものを包括した透明感が高い報告書になっています。これからこの透明感のある報告書を染めていかなければいけないと思います。染め方はそれぞれの読み手の立場によって違うため、このような透明度の高い報告書になったと認識していますが、染め方を書いていない気がしています。そういう意味で言うと、どう染めていくのか具体的なアクションプランを、それぞれの立場の方に示すのが、次のステップであると感じています。

これが一つの2.0構想案としての柱であるのを、実地とつなぐ何かが必要だと思っています。誰がやるのかはわかりませんが、原課を持つ人たちに、これの担ぎ方をしっかりしてもらうことが、次のステップであり、すごく重要だと思います。そうでなければ、構想案3.0にどうつなげるかよく分からなくなってしまうと思います。3.0につなげるためには、事例を積み上げる必要があります、その事例を拾う中で次のステップへ進める形ができると思います。

少し雑駁ですが、事務局の努力が実るためには、次のステップが重要であると思います。

ありがとうございました。

○三輪座長 ありがとうございます。

正に透明度があり、ここは全部出来上がっていると、この次について農水省として、どうお考えなのか是非お聞かせいただきたい。

○菅家審議官 ありがとうございます。

正にこの報告書を単なる文書で終わらせないためには、次のステップが非常に大事であることは、全く同じ認識です。

そこで、第6章の終わりに、次の3.0を、2026年を目途に再度実施すること、その間のブリッジとして何もなく過ごすことではなく、次のステップにつなぐための議論や情報共有の場を設けたいと考えています。その中で様々な事例を示し、この文書を具体化していく取組、努力をしていきたいと考えています。それに当たり、また皆様から意見を頂戴したいと考えています。

○三輪座長 ありがとうございます。

先ほどの先生の発言の繰り返しではありますが、デジタル担当の方々はそうとして、他の部局は、この2.0を受け止めて次はどのような形で政策に具体的に反映するか、その流れについて教えてください。

○菅家審議官 この文書作成に当たり、検討委員会としてのメッセージであるという位置付けで皆様の意見を最大限反映させたいと思いますが、同時に省内の各部局にもこの内容について調整をしています。内容は各部局が考えている政策の方向性と一致しています。未来予想図は、もう少し先の話になりますが、そのほかの点は各部局の政策の方向性とも一致しています。我々が各部局にしっかりと声掛けはしますが、各部局の方でこの内容に沿った政策が今後展開をされると承知しています。

○三輪座長 ありがとうございます。

大橋先生、いかがでしたか。

○大橋委員 是非、原課にしっかりと担いでもらい、補助要件に入れるぐらいしっかり活用してもらおうというのが重要だと思いますので、是非よろしくお願いします。

○加藤委員 言語化していただきありがとうございます。

農業生産の現場で、この2.0を使いやすくするための意見です。日本の農業の場合は、農業事業の目的が多様だと思います。100品目オーガニックで作る方や、単品目での大きな農業や、穀物を作る農業など、多様な点が日本の農業の一つの大きな特徴だと思います。そういう点でDX、デジタルの使い方でも多様な使い方があり得ますというのが一つです。なので、少し農業経

営の目的を別に整理することが必要だと思います。

もう一つ、例えば新規就農者、レベル別、フェーズ別の整理も必要だと思います。新規就農者が必要なツールやDXの仕組みと、プロ農家の仕組みとは大分違います。プロ農家は皆さん大体、「あまりセンサーは要らないよ」と言います。次の子たちを育てるのに、今の土がどんな状態かカメラで撮り、自分の商品の状況を見て、AIで生育管理をする。そして、それを新しく入ってきた人たちに教えて仲間を増やすためのツールとして使います。このため農業経営のフェーズにより使い方が違うと感じています。どういう農業経営を最終形として求めているのか縦軸と横軸でそれぞれにフェーズがありますので、そのフェーズごとにマトリックス的にプロットすれば分かりやすいと感じました。

もう一つはGXです。これは本気で日本の農業も取り組まなければ、乗り遅れると感じています。私は自動車関係とのつながりが強いので、ポリシーメーカーキングしているヨーロッパの話を見ると、おそらく輸入規制も掛かるとのことなので、これから日本は内需で生きていけないことを考えると輸出促進になるわけですが、そのときにGXに対応しておかなければ輸出できないことになります。しっかり情報をトレースできていないとGXに対応できません。DXを使いながらGX対応をする、これは喫緊の課題だと思います。

○三輪座長 ありがとうございます。

加藤委員から大きく二つ頂きました。その二つ目は、GXとDXで、海外への輸出も含めて、しっかり対応しながら、GXをうまく追い風にDXを進める話だと思います。

1点目は、事務局がどのように対応するか方針を答えていただければと思います。先ほど経営の規模や、スタイルの縦軸、横軸のフェーズについて、マトリックスでプロットすることによりいろいろな方がDXに取り組める、若しくはその恩恵を受ける、多様な日本らしい農業の在り方であり、変に画一性を強いるものではないと理解しました。そこの対応方針について考えを聞かせください。

○菅家審議官 ありがとうございます。

この構想の中では、加藤委員が1点目におっしゃったまでは書き切れていなかったということかもしれませんが今後1年間の中で、マトリックスなどもいろいろ知恵を絞ってどのようなものが作れるか考えたいと思います。2点目のGXは、正にそのとおりだと思います。

○三輪座長 ありがとうございます。

マトリックスを今すぐに入れることは難しいと思いますが、そこが必要な旨や、そのときの着眼点は、外せないポイントであるため、追記する方針でよいでしょうか。

○加藤委員 はい、よろしくお願いします。

○三輪座長 よろしく申し上げます。

ただ、全てに配慮することにより成長産業化、例えば儲かる農業の実現が薄まることのないように、私からもリクエストさせてください。あれもこれも全部守るみたいな誤解がないようにしていく必要があると思います。最終的には強くて元気のある魅力的な農業をみんながやれることだと思います。

○休坂委員 大量な情報の取りまとめ、また、適宜反映ありがとうございます。

私からのコメントは、本文を一字一句読む方は限られますので、概要版を作成していただきたい。それが1点目です。

もう一点が、農業DX構想で生産から流通と、多岐にわたり全てを網羅してDX化だともいいますが、1点だけ他のところで記載されていない点として、行政のDX、いわゆるIDであったり地図であったり、eMAFFを中心としたデジタル化が実は肝だと思います。インフラから広げるデジタル化は、デジタル化されれば紙の業務が無くなるため、多大な影響があると思います。スマート農業は、メーカーやれば何となく進みますが、行政のDXは農水省が中心となり普及・推進していくものだと思いますので、その辺りを色濃く表現していただきたい。eMAFFが広がり農業界全体への効果があると感じましたので、普及の検討もお願いします。

○三輪座長 ありがとうございます。

事務局よりコメントをお願いします。

○板橋課長補佐 1点目の概要版ですが、参考資料として作成した5ページのものがあります。これを使って一般の方々など説明していただきたいと思います。

○休坂委員 確認いたします。

○菅家審議官 2点目ですが、行政のデジタル化を今後どう浸透させていくかは、スタート台に立った段階です。

デジタル化が自己目的化することなく、あくまで使うことにより生産者や申請者が紙の書類作成による負担が軽減されることに重点を置いて前に進めていきたいと考えています。

○三輪座長 ありがとうございます。

休坂委員からいただいた一つ目のご意見の概要版は、この後、例えばイラストで分かりやす

くすることや、BUZZ MAFFを含めたSNSを使うことや、プロモーション動画作成などが考えられると思います。あとはアグリビジネス創出フェアのようなイベントや講演、対談、パネルディスカッションの場で扱うことなど、この後のことは、シームレスに各関係者に協力いただくよう検討いただきたいと思います。

○下山委員 ありがとうございます。リンクデータの下山です。

今回の構想の検討の終盤は、他の委員のフィードバックやここまでの検討会の内容が非常に丁寧な反映されていると感じました。また、スタートアップの皆様からの発表や意見についても反映されているとおもいます。この先、私は、普及啓発に尽力したいと思っていますが、その点で本当に自信を持って伝えることのできる内容だと思います。

特に、ビジョンがしっかりしているところが良く、例えば「バスに乗り遅れるな」といったかなり強めの表現を使い攻めた姿勢が非常によく出ているところはお薦めしたいポイントです。都道府県や基礎自治体との仕事を通して、農業分野の方々に伝え、実装していただける支援をしていきたいと思う内容です。

この構想を実現するに当たり、要約版などの、分かりやすく伝える方法も検討していきたい。例えば、DXに至るまでの3段階などは、なかなか伝わりづらいと感じています。その辺で参考になるのが、愛媛県のデジタル戦略では簡単に要約した内容が書かれています。例えばデジタルイゼーションの段階では情報のデータ化であり、またデジタルイゼーションは業務のICT化の段階である。そしてDX、デジタルトランスフォーメーションになるとデジタルによる価値創造ができる段階である。そういう簡単な言い換えをすることが一つの方法だと思います。この点を、伝える際に使いたいと思います。

あともう一点、今回の構想はマイルストーンを示すナビゲーターだということですが、どのくらい実現に向けて進んだかを示す必要があると思います。そのときに進捗を示す指標や、目指すに当たり、何%進んだのか定量的な評価も入れる必要があります。例えばAIによるサポートや新規就農者の方に向けてのハードルを下げる取組が進んだ場合に、実際に日本全体で新規就農者がどのくらい増えたのかを、幾つかの指標を設定し、それを全員で共有した上で、このままの進め方でいいのか、それとももう少し改善が必要なのか評価する必要があると思います。今回は記述的にナラティブな手法が使われているのも、一つの作戦だと思うので、より伝わりやすい形で述べていただき、この先もう少しロジックも入れ、これを達成するためには何が必要で、その結果どんなデータに反映されるかを見る必要があると思います。それがEBPMの第一

歩であって、データで現状を把握するために、今後検討していく必要があると思います。今後、実現に向けた取組として検討いただきたいと思います。

○菅家審議官 ありがとうございます。

今後の構想の普及についてですが、説明を世の中に対してする際に重要になるのが第1点かと思えます。また下山委員からもアイデア、知見をお借りしたいと考えています。

2点目は、デジタルの進捗度合いをどのようにして定量化するか、全体で包括的に定量的な指標があれば非常に望ましいのですが、なかなか答えには至らない状況です。どのようなものが指標足り得るのか、引き続き考えたいですし、また良いアイデアがあれば頂戴したいと考えています。

○三輪座長 ありがとうございます。

今後、指標をみるには、単純にKPIを並べるわけではなく、ロジックモデルや、インパクトマップを作るなど、何かしらの工夫が必要です。DX構想に書いていることを一個ずつやっても、日本の農業全てが変わるわけではないと思います。DXでやれること、やれないことを含めて考えると、どこまで進んでいるのが順調なのか、正しい道筋なのかは、複雑な形を解きほぐすツールが必要だと思います。最終的なKGIだけで見ると何も変わらないように見えるところは、本質ではない部分ですので、そこら辺はDXが進んでいるか、進んでいないかがストレートに分かるような工夫をして頂きたいと思います。

下山委員からは、引き続き助言を頂ければと思います。

○下山委員 指標を考えることは簡単ではないと思いますが、事業の結果を生み出すビジョンを改めて定義することは、考え直す良いきっかけだと思うので、そこは時間を掛けてでもやっていけたらと思います。私も引き続き協力させてください。

○荻野委員 大変な改修作業に敬意を表します。一方で、本編はナラティブで量も多いため、取っつきにくいこともあると思います。概要版があれば、5分でこの取組を魅力的に説明ができだと思います。それでいてこの文章編もしっかり読んでいただけたらと思います。

それから、すごく時代的には重要なことですが、気候変動の話だけではなく、その先にある生物多様性もホットトピックになっています。ヨーロッパでの規制についてこの先運用していく際に非常に重要だと思いました。

第5章の未来予想図はとても良いと思います。これは生産者がDXに取り組むきっかけになる可能性がありますし、起業家やスタートアップの方に対してこのようなものを作れば世の中に

貢献できる、あるいは変えることができる。また、ビジネスとしても成り立つヒントになるのではと感じました。

授業で学生に、例えば農水省が未来を描いたり、あるいは生産者に対して働きかけていることを紹介したりする際にもよいのではと感じました。そういう活動を通してお手伝いしたいです。

第5章の、流通・消費については、GXと絡んでエシカル消費の話や、フードマイレージの話が絡むと思います。その辺りは今後の運用の中で担保していくべきだと思います。

○菅家審議官 ありがとうございます。

学生にも紹介いただけるということで、大変有り難い次第です。

GXの点も、荻野委員の考え方と相違ないと考えています。

未来予想図については、今回すこし工夫できたと思います。この点を評価していただきありがとうございます。

○三輪座長 ありがとうございます。

概要版の捉え方が事務局と委員で異なっているのかもしれませんが。委員の皆さんが考える概要版は、例えばパワポ1枚や、見開きのパンフレットのように、一目でわかる資料をイメージしていると思います。荻野委員は、概要版以外にパンフレット等を用意した方がいいといったいみでしょうか。それとも、まだ御覧になっていなかったということでしょうか。状況確認したいと思います。

○荻野委員 共有いただいている概要版をかみ砕いてスライドにすればよいと思います。これでしたら3分から5分で十分魅力的に話せると思います。

○三輪座長 ありがとうございます。休坂委員いかがですか。

○休坂委員 前回の農業DX構想では、概要版と要約版と本文がありました。概要版はパワポ2枚で表現されていて、要約版がワードで4枚でした。できれば概要版と要約版があれば有り難いです。

○三輪座長 ありがとうございます。

現状の概要版は非常に分かりやすいと思いますが、これをより伝えるときに1、2枚ものの資料があればよいと思います。ただ、この2.0の公表と合わせる必要はないと思います。概要版の見た目ですが、例えば本文の中にある図や写真が合わさった分かりやすいものがあると、伝導、普及の際に使いやすさを感じました。例えば、自治体や地元の農業者に話す際には、

「DX構想ってこれだよ」とまず言えるドアノックのようなものがあればよいなと思いますので、作っていただきたいと思います。

○岡林委員 各委員の意見が反映させていて、クリアな計画になったと思います。

誰が使うかというところですが、農家だけではDXできないため、農家を取り巻く生産、流通、消費まで含めたステークホルダーについての位置付けや、誰が使うかの位置付けも明確にできたと思います。それから誰が誰のために使うかは、一番は農業者が変わらなければいけないですが、農と食を取り巻く流通、消費まで含め見えた形で書いてあると思います。

誰が誰のために、どのように使うかは、目指す姿について未来予想図も含めて明確に示されていると思います。イメージしやすく、どこに向かってこの構想があるのかがクリアになって良かったと思います。

本文の、「バスに乗り遅れるな」ですが、そこは引っ掛かりました。そういうキャッチーでお役所的でない記述も多々あり、引き付けられる構想になったと思います。

4コマ漫画ではないですが、分かりやすい説明資料については農水省のホームページの子供のページのようなものが、未来予想図だけでもあったらいいとは思いました。

これから農業をやろうという人でデジタルに取り組まない人はいないと思います。それから農業法人で生産から流通までやっている人でデジタルを知らない人はいないと思います。

オランダで情報交換をしていて、日本の農業では、パソコンを使えない農家がまだ施設園芸農家でも半分以上いますという話をしたらオランダの人はびっくりしました。農業経営者でデジタルが使えない人はオランダには一人もいないですが、日本は経営者でも、DXという言葉すら知らない人が沢山いることを遺憾に思っています。

ただ、それを嘆いてもいけません。Society 5.0の発想は、自然とDXを使っている世の中にするというものです。高知県は、その発想でSAWACHIを作っている。デジタルを使ってPDCAできる人は前へ進んでもらって、プラットフォームとしてもどんどん使ってもらえばいい。それができない人は、県の普及委員やJAの営農指導員などが伴走支援してデジタル化を促すようにしています。指導者自体もデータに慣れていないところもありますので、日本の場合はDXで埋め尽くすためには、意識改革がかなり必要だと思いました。

生産から流通、消費まで扱っている法人農家は、この構想を1人で読めますし、1人で向かえると思いますが、作るだけの農家にどのようにDXを進めてもらうかが重要です。JAから荷物は卸売市場に消えていきますが、そのメインストリームのJA卸売市場がしっかりDXでつなが

り、消費地の情報が生産者にダイレクトに届く、生産情報がダイレクトに消費地まで届いて、自分の作った農産物がどこで消費されて「おいしい」、「ありがとう」という声が直接届くように、メインストリームの流通が変わらなければ、全体も変わらない気がします。

地方自治体では、農業DXに取り組んでいない県はないので、直接農家に関わる地方自治体は、今回の構想を、認識、意識して、マイルストーンを持ってDXに取り組むことが大事だと思います。補助事業の要件にしてもよいですし、地方自治体には認識・意識させて推進していただきたいと思います。

補助事業で支援するJAの意識が変わらなければ、末端の農家まで届きませんので、地方自治体も一緒になってJAの改革に取り組んでいきたいと思いました。

○菅家審議官 ありがとうございます。

この構想案を評価いただきましたが、これは委員の皆様の意見を反映したものですので、委員の皆様からのすばらしい意見を頂戴したためだと思います。

それから、2点目の分かりやすい資料ですが、概要版、要約版だけではなくビジュアルで分かりやすい資料を今後考えていきます。

それから3点目、なぜ進まないのかですが、いろいろな要素があるかと思いますが、端的に言うとも我々がやるべきことは、技術的なハードルを下げながら使う生産者にメリットを示すことだと思います。それから全体に浸透していくよりは、メインストリームをしっかりと取り組んで成果を挙げていただき、それを見て、「ああ、いいな」と思う生産者から取組が広がっていくのではと思います。

サービス事業体にデジタル農業の取組をやらしてもらおうという流れになっていますので、直接スマート農業やデジタル農機の恩恵に直接あずかれない方でも、サービス事業体のサービスを通じて間接的にスマート農業のメリットの恩恵にあずかると場合もあると考えています。

いずれにしても、省内各部局と我々は、しっかり勉強して、このDXの取組を進めていきたいと考えています。

○中谷座長代理 中谷です。

最終案の取りまとめ、ありがとうございました。

構想の中で印象を持ったのは、4章の後半以降がまだ実現していないことの記述です。どうしてもデータを使ったらこんなことができますよ、あんなことができそうですよという話に終始してしまっています。前半に具体的な事例が豊富に出ているだけに、そのコントラストがす

ごく目立つと思いました。ただ、これはやむを得ないことで、問題は、すごく抽象的なイメージしかないものをこれから先どう具体化していくのかというのが、これからこの構想の2.0から3.0に向けての私たちに課せられた役割なのだと思います。

大橋委員から報告書を染めていく話がありましたが、その道筋をどうするか一つの案として、5章の未来予想図で、未来の姿が細かく出てきます。これは未来の部分も多いですが、実現している部分もたくさんあると思います。ですので、バージョン3.0に向けてこの部分を常にアップデートしていくことができないかと思っています。未来予想図の、この部分は実はこういう形で実現しているのだとか、一部では、このような取組が始まっていると、常にアップデートできれば、自ずと報告書に色付けができるのではないかと考えていました。

バージョン1.0は羅針盤のように、DXという広い海に乗り出していくような構想案だったと思います。そういう意味では、最初の羅針盤として、全体の進むべき方向が分かればよかったのですが、今度はマイルストーンですので、私たちは海から陸に上がり、具体的な道筋を考えなければいけません。そうなったときに、構想2.0ができておしまいではなく、常に手元に置いて、参照してもらえなければならないと思っています。つまり、マイナーなバージョンアップを求められるのではと思いました。バージョンには1.0、2.0と小数点以下の番号もあるので、バージョン2.0の次が3.0ではなく、新しい事例が加わったら2.1にするなどの、マイナーバージョンアップができれば、常に注目を浴びて、この構想がマイルストーンとして参照されるのではないかと었습니다。

もう一つは、農業DXに関するポータルサイトが無いと思います。DXに関する情報が広がると情報の一元化や集約をして、そこでは法令や構想、地域の取組などの、様々な情報をワンストップ得ることができるように、ポータルサイトの構築について考えてもいいのではと思いました。

1.0からこの2.0までの間に、1.0をそれほど振り返りませんでした。ですので、2.0は、何回も振り返っていけるようなものになればと思っています。

○菅家審議官 ありがとうございます。

将来的な方向性と具体的な歩み、これをどう整合させていくのが、各委員からの課題提起ですが、それに対して中谷委員から具体的な提案を頂いたので、その点をよく検討します。ポータルサイトですが、予算が掛かる話ですので、ここは検討させてください。

○三輪座長 ありがとうございます。私のからも意見を申し上げます。

まず初めに、我々の意見をしっかりと反映して取りまとめていただき感謝申し上げます。硬過ぎない表現で、「バスに乗り遅れるな」や「ひと山越える」などの表現が、分かりやすく、我々の検討会からのメッセージだという今回の立ち位置をうまく使って伝えられている部分だと思います。

また、未来予想図を言語化していくことが一番大変だと思います。今回は、その点がまとめられていて、すばらしいと思います。

何となくのイメージ図では、細かい部分を表現していないため、逃げられる形になります。この場合は、ぱっと見はいいですが、踏み込めない部分があります。しかし今回は、未来について今考えられる絵姿を分かりやすく書いたことが、すばらしく、使えるものになると思います。それを更に分かりやすくするなど、ビジュアルライズするというのは、正しいステップアップであると強調申し上げます。

中谷先生の意見にあった、ポータルサイトなどで分かりやすくまとめて伝えることは非常に大事だと思います。動画やイベントなどで、この未来予想図をいろいろな方に描いてもらうボトムアップのアプローチというの、次年度、次々年度とかであり得ると思います。我々委員も現場を持っていて、それぞれ事業や行政、若しくは研究をやっていますので、いろいろな方々の代弁をしているつもりですが、我々がすくい切れていない部分には、秘めている思いやアイデアがあると思います。そのアイデアを引き出す方法として、例えばコンテストや文書コンクールなどで、学生が参加するなどが考えられます。このような次に向けてのアイデアを引き出す工夫というのをお願いします。それが、2.0と3.0の間の2.1の部分になるのではないのでしょうか。今回書けなかった部分のパーツとしてアップデートできるのではと思っています。

今回の文書で非常に強調したい箇所ですが、今できることが何であるかを明確化したことだと思います。未来志向でバラ色の話ではなく、今何ができて何ができていないのかというところまで、踏み込んだ表現だと思っています。

DXの話は、DXの話だけになりがちですが、デジタイゼーション、デジタルイゼーションのステップの中で、今がどこで、これから先には、どれほどの大きなステップアップが必要かを書いたことは、読む方が当事者意識を持つ重要な部分だと思っています。

1.0の段階では、DXの手前まで来ているとの整理でしたが、そこは農水省がeMAFFやeMAFF地図などで牽引してきたためだと思います。それが、農業者や事業者の方DXの契機になっていると思います。

この後は、農業者やSIer、若しくはメーカーが走っていく段階になると思いますので、農水省としてもモードチェンジが必要になると思っています。今までの「付いてきてね」、「我々がまず自分でやってみるよ」から、「皆さん頑張って、我々はしっかりサポートして、しっかり押しますよ」というモードになるため、背中を押すことや、一緒に伴走することに例えば補助事業などの具体的な施策を落とし込んでいただきたいと思います。

農水省の皆さんは、農業者や農村住民と一番接しているいわば、DX、農業・農村のプロですので、他省庁にまたがる取組が必要な中でリーダーシップを取っていただき、農水省、政府全体を引っ張っていただくよう強くお願いします。

○菅家審議官 三輪座長、全体の総括、ありがとうございます。いずれも重要な点だと承知しています。引き続き御指導をよろしく申し上げます。

○三輪座長 ありがとうございます。

本文含めて軽微な表現等の修正もあると思いますが、大きな変更にはならないと理解しています。軽微な修正は事務局がおこない、確認は座長に一任いただけますでしょうか。

それでは、事務局とコミュニケーションを取りながら、責任を持って本日の内容を反映いただきます。

それでは、今日の議論を終了します。

これまで全8回の検討会で、荻野委員の尽力により、スタートアップの皆様からの声を直接聞ける場も設定いただきました。有意義な意見を頂き、農業DX構想2.0が農業者の方々、関連事業者の方々、農村住民の方々へのエールとなるような、取りまとめになったと思います。改めて委員の皆様へ感謝を申し上げます。

○田雑調査官 この農業DX構想2.0の公表期日は、明日の10時30分を目途としています。プレスリリースを行うとともに農林水産省ウェブサイト、農業のデジタルトランスフォーメーションのサイトで掲載する予定です。

○三輪座長 ありがとうございます。

今後はどう広め、実際の現場に落とすかが大事になると思います。今回は検討会からのメッセージですので、農水省の皆様はもとより、我々委員も発信する当事者ですので、既に各分野でトップランナーとして農業DXを牽引している委員の皆様ですが、引き続きこの2.0の実現に向けて尽力、協力をお願いします。その中で得られたものを、合間合間のバージョンアップの

として反映できればと思いますのでよろしくお願いいたします。

なお、今回の構想案は、明日プレスリリースされます。それと合わせ私の方から、明日午後1時からの記者懇談会の場で検討会座長として記者の皆様に代表して説明をさせていただければと思います。内容は、また事務局から委員の方々にフィードバックして頂ければと思っています。

進行を事務局にお戻します。

○田雑調査官 本日も非常に活発な議論を頂き、ありがとうございました。最後にサイバーセキュリティ情報化審議官の菅家より挨拶を申し上げます。

○菅家審議官 昨年6月から8回にわたって、委員の皆様には、熱心な議論をして頂き心より感謝申し上げます。また、各回でゲストの方には、たくさんのすばらしいプレゼンテーションを頂きました。その皆様に対しても、この場をお借りして御礼を申し上げます。各委員より構想案に対する評価を頂く声も多々ございましたが、それは、委員の皆様の意見を最大限反映したものです。そういうすばらしい意見を毎回頂きまして、改めて御礼申し上げます。

農水省としても、今回この構想を検討委員会からメッセージとして頂いたという形になりますので、この構想を受け止めて、しっかりとこの農業DXに取り組みたいと考えています。このDX構想の議論は、今後も続きますので、引き続きよろしくお願いいたします。

○田雑調査官 このDX構想検討会はこれまでとします。

これまで約8か月間、計8回もの検討会に、出席していただき貴重な意見、充実した議論、誠にありがとうございました。